

氏名(本籍)	徐 暢			
学位の種類	博士(社会工学)			
学位記番号	博 甲 第 9830 号			
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審査研究科	システム情報工学研究科			
学位論文題目	中国青島市における近代住宅の建設実態： 1923-1947の「城市建设档案」に基づく分析			
主 査	筑波大学 教授	Ph.D. in Regional Science	有田智一	
副 査	筑波大学 教授	博士(農学)	村上暁信	
副 査	筑波大学 教授	博士(工学)	藤川昌樹	
副 査	筑波大学 教授	博士(工学)	野中勝利	
副 査	神奈川大学 教授	工学博士	内田青蔵	

論 文 の 要 旨

本論文は、中国の近代都市を代表する都市の一つである青島を取り上げ、とくに1922年から1947年の間に作成された「城市建设档案」を主史料として用いて、この時期の住宅の建設実態について検討を加えたものである。具体的には、①青島の小地区内における住宅地の形成過程及びそこでの住宅需要-供給-住宅類型が如何なる対応関係を持っていたか、②それぞれの住宅類型は施主側の如何なる需要見込みに基づいて計画されたのか、③建設後の住宅やそこに住む人々は地域の変容とともにどのように変化したか、について検討している。

第1章では、研究の背景と目的、先行研究、方法と使用する史料、について述べられたあと、本論文の対象地である青島についての概要が紹介されている。そして、住民の階層に対応させて、中流層以上の住宅地だった大学路一帯(第2章)、中流層の商住混在地区であった旧市場町・新町(第3章)、下流層の住宅地であった四川路一帯(第4章)を選択し、施主が行政に対して提出した建築申請書類である「城市建设档案」を用いて詳細な分析を加えるという本論文の構成が示されている。また、近代の青島は、ドイツ統治時期(1898-1914)、第一次日本統治時期(1914-1922)、中国北洋・国民政府時期(1922-1937)、第二次日本統治時期(1938-1945)という統治主体の異なる四つの時期を経験していたため、以下の各章ではそれぞれの時期に対応して分析が行われている。

第2章では、中流層以上の住宅地だった大学路一帯を取り上げている。大学路はドイツ時代に開発された青島区の東隣に位置するが、その後大学が建設されたため洋風の景観をもつ住宅地が形成され、そこでは独立住宅や上下二戸一住宅といったタイプの住宅が建設されたこと、施主は一貫して中国人が中心であったことも解明されている。ただし、第二次日本統治時期になると、集合住宅や複合的住宅なども建設されるようになり、住民の階層はより幅広くなったともされている。

第3章は、中流層の商住混在地区であった旧市場町・新町を対象とした分析を行ったものである。ドイツ時代には煉瓦工場しかなかった地区であるが、第一次日本統治時期より開発が進み、商住が混在する地区が形成され、ここでは里院型集合住宅や長屋型集合住宅が主に建設されたこと、施主も日本の不動産会社や商人が中心であったことが示されている。

第4章では、下流層の住宅地であった四川路一帯が取り上げられている。海に近いこの一帯は、当初物流や工業に関わる中国人経営者がその労働者を住ませるために住宅を建設していたが、その後国民政府が福祉政策の一環として下流層用の集合住宅を建設する一方、この一帯に集まった労働者みずからが住宅を建設することもあったことが明らかにされている。ただし、第二次日本統治時期になると中流層が住民として流入してきたともされている。

第5章では以上をまとめるとともに、本論文が扱った青島を、中国の近代都市の住宅史の中に位置付けている。著者は、外国資本による不動産開発と住宅供給が近代初期に行われる一方で、中国人による自発的近代化が進展したのは、天津や上海などの都市と共通しており、青島の一般性を示すものであるとする。しかし、一貫して住宅の洋風化と近代化が行われて中国風住宅要素が限られていた点、中国人が開発を主導した点は青島の特徴であるとしている。

審査の要旨

【批評】

近代青島の都市史・都市計画史、またそこに建てられた住宅建築についてはこれまでも多くの研究が積み重ねられてきている。しかし、これらの多くはドイツ時代の影響を過大に評価し西洋風の要素の存在・継承を強調したり、あるいは「里院」のような住宅類型を青島の特徴であると性急に結論づけたりするなど、偏りのあるものが多かった。

これに対し著者は、住宅史に関する一級史料である当時の「城市建设档案」を丹念に分析して、当該期の住宅建設の実態に迫っている。この結果、上下二戸一住宅のような類型の住宅が広く建設されていたことを解明するとともに、「平民住所」のような福祉政策としての住宅建設が行われていたことを明らかにしている。また、中国人・日本人がいかに関わっていたかをも明らかにしている。こういった多くの点で著者の研究の新規性を認めることができる。また、他の史料も併用することにより、これらの発見を当時の都市形成や個々の住宅に暮らした住民層と関連付けてその解釈を行っている点も優れていると評価できよう。

住宅をその様式や平面のみならず、都市的環境、建設や設計の主体、住民などと関連づけて理解しようとした本論文は社会工学的な成果と評価することができる。以上から社会工学分野における博士論文として十分な水準にあると認められる。

【最終試験の結果】

令和3年2月3日、システム情報工学研究科において、学位論文審査委員の全員出席のもと、著者に論文について説明を求め、関連事項につき質疑応答を行った。その結果、学位論文審査委員全員によって、合格と判定された。

【結論】

上記の学位論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（社会工学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。